6/13 福井

高浜使用済み燃料 仏へ搬出

関電社長 知事に計画提示

「県外中間貯蔵と同義」

関西電力の森詳社長は12日、県庁で杉本達治知事と面談し、高浜原発で保管する使用済みプルトニウム・ウラン混合酸化物（MOX）燃料と使用済み核燃料の一部を2020年代後半にフランスに搬出する計画を示した。電気事業連合会（電事連）がフランスで行う実証研究の一環。関電は県内原発から出る使用済み核燃料の中間貯蔵施設の県外計画地点を年末までに県に提示するとしており、森社長は「県外に搬出されるという意味で中間貯蔵と同等の意義があり、県との約束はひとまず果たされた」との認識を示し、県に理解を求めた。

（岩淵誠郎）【2面に関連記事】

杉本知事は「中間貯蔵と同等の意義があるとか、計画地点確定が達成されたという考え方は、これまで私どもが申し上げてきた内容に沿ったものかどうか、十分精査させてもらう」と述べ、今後国の考え方や立地市町、県会の意見などを聞いた上で判断するとの考えを示した。判断時期については明言を避けた。

フランスへの搬出計画は、電事連が、使用済み核燃料を再処理して取り出したプルトニウムを再利用する「プルサーマル発電」で生じた使用済みMOX燃料を、フランスのオラノ社と連携して再処理する実証研究の一環。プルサーマル発電を実施している関電高浜3、4号機など国内4基の中から、プルトニウム含有量が最も高い使用済みMOX燃料を保有する高浜原発を選んだ。

計画では、高浜原発内に貯蔵している使用済みMOX燃料約20体（10トン）と使用済み核燃料約400体（190トン）をフランスに搬出し、30年代初頭に再処理する。関電によると、実証研究後は再びMOX燃料として返還されるという。

使用済み核燃料の中間貯蔵施設の県外立地を巡り関電はこれまで、30年ごろに使用済み核燃料2千トン規模が貯蔵できる施設の操業を開始すると県に説明してきた。フランスへの搬出が高浜原発の使用済み核燃料の一部に限られることについて、森社長は「（当時よりも廃炉で原発2基が減り）7基体制となっており、使用済み燃料の発生量の減少なども考慮する。今後も必要な搬出容量を確保するため、あらゆる可能性を追求する」と強調した。

関電は中間貯蔵施設の県外計画地点提示に関して、これまで自ら設定した期限を3度延期し、23年末までに確定させると約束していた。一時、青森県むつ市の中間貯蔵施設を電力各社で共同利用する案も浮上したが、国内での計画地点提示は困難な情勢となっていた。